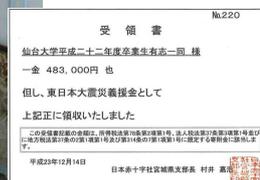
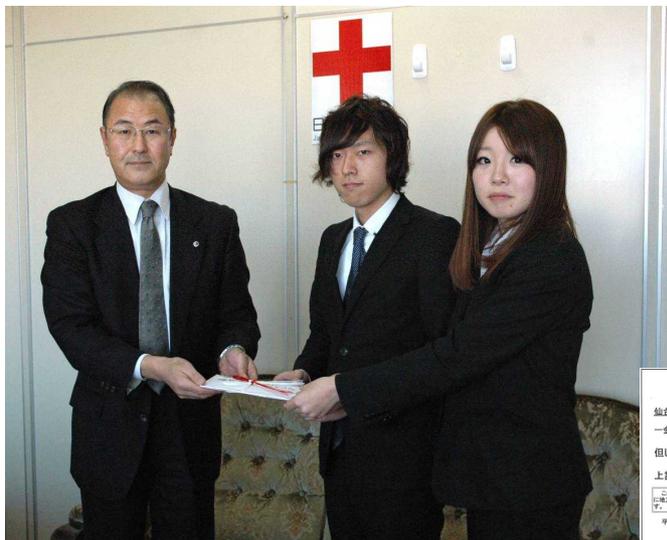


# Monthly Report

Vol.68 / 2011 Dec.

## 平成22年度卒業生有志から日本赤十字宮城県支部に義援金



12月14日（水）、学友会委員長の野村早紀さん（体育学科3年）と学友会副委員長の風間靖久さん（健康福祉学科3年）が日本赤十字宮城県支部を訪れ、平成22年度の卒業生有志からの義援金483,000円を鈴木隆一事務局長に手渡しました。

この義援金は卒業生が今年3月19日に行うはずであった卒業記念パーティーに使用するために集金していたもので、卒業生の一部から「震災の影響で使用することがなかったこのお金を4年間過ごした被災地への寄付にしてほしい」との声があがり、これに賛同した有志のお金が集められたものです。

鈴木事務局長からは「ありがとうございます。卒業生のお気持ちとして確かに受け取らせていただきます」との言葉と、「仙台大学の震災復興に向けたボランティア活動等はよくメディアなどで目にしました。これからも頑張ってください」との言葉をいただきました。卒業生に替わり義援金を届けた野村さんは「先輩たちは楽しみにしていた卒業式や卒業記念パーティーが中止となっただけでなく、友達に会えないまま新しい生活を歩まなければならない状況で、残念な思いをしていた方は多かったと思います。そんな中でも、人のためになろうと行動した先輩たちを誇りに思います。」と話していました。

日本赤十字社宮城県支部HPで紹介されています  
<http://www.miyagi.jrc.or.jp/contribution/index.html?php>

### 目次

平成22年度有志から日本赤十字宮城県支部に義援金	1
仙台大学同窓会より1千万円の義援金	2
健サポ認定書授与式 NSCAジャパン講習会	3
海外研修・短期留学合同報告会	4
吉井講師がエコプロ出展 スポーツを考える会	6
学生の活躍	7
訃報	9

学生の活躍や、取り組みをご存知でしたら  
 広報室までお寄せください。  
 Monthly Reportで紹介する他、報道機関  
 にも旬な話題を提供していきたいと考えて  
 おります。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、  
 広報室までご一報ください。

#### 広報室

直通 0224-55-1802

内線 佐藤美保 256

土生佐多 200

伊東宏之 271

Email:kouhou@scn.ac.jp

## 仙台大学同窓会より1千万円の義援金



12月19日に仙台大学同窓会を代表して鈴木省三会長より仙台大学に対して災害ボランティア用車両(マイクロバス1台、ワゴン車1台)の購入費用として1千万円の義援金が贈られました。これは、震災復興に向けた活用を目的に、今年8月の同窓会代議員会で承認されていました。背面に「贈：仙台大学 同窓会」と刻まれたマイクロバスは26日に納品され、ワゴン車は1月初旬に納品される予定です。



## 洪水被害のあったシーナカリンウィロート大学に5万バツの見舞金



国際交流締結先のタイ王国・シーナカリンウィロート大学に対して、本学より見舞金5万バツ(約126千円)が贈られました。これは、タイ王国が10月初旬から洪水被害に見舞われていることに伴い、科目等履修生として本学に留学中のソンプラソン・プラセトスリさん、タニット・リンブラセルトさんが国際交流センターを通して大学祭や学内に募金を呼びかけたものです。大学祭への来場者や教職員から集められた募金5万バツが贈られました。



大学祭で募金を呼びかけたソンプラソン・プラセトスリさん(左)と募金する宮坂基也さん(体育学科3年)

シーナカリンウィロート大学からの御礼状



## 健康づくり運動サポーター認定証書授与式



12月20日（火）にA棟大会議室において健康づくり運動サポーター認定証書授与式が行われ、ベイシック認定者18名とアドバンス認定者6名に対して朴澤学長より認定証書が授与されました。今年の健康づくり運動サポーターは、延

べ400名が災害ボランティアとして避難所や仮設住宅でのエコノミークラス症候群予防運動の指導をして回り、被災者への健康維持に大きく貢献しました。この活動は現在も継続しています。

認定証書授与の後には、4年生の小熊理恵さん（体育学科）、横山宗平さん（健康福祉学科）、佐藤幸子さん（運動栄養学科）から後輩に向けたメッセージが述べる時間が設けられ、横山宗平さんは「活動で得た貴重な経験は自分を大きく成長させ、これからの社会人としての生活に役立つものと考えています。被災地には今も支援を待っている人たちがいるので、後輩のみなさんには積極的に被災者支援ボランティアに参加してもらい、多くのことを学び取っていただきたい」との話がありました。

## 本学を会場にNSCAジャパン講習会を開催



12月8日（木）に本学B300教室を会場にして「NSCAジャパンの海外講師招聘セミナー（NSCAジャパン主催、仙台大学後援）」が開催され、米国NSCA理事長のJay R. Hoffman博士が講演を行いました。Jay R. Hoffman博士はNFL（National Football League）の選手としてプレーした経歴を持ち、研究者としても様々な学

術部門での賞を受賞しています。特に運動栄養・トレーニングの分野での権威として知られています。米国NSCA理事長の講演を聞こうと会場には東北在住のNSCAジャパン会員と本学の教職員あわせて約200名が聴講しました。講演は、「ストレングストレーニングとピリオダイゼーションの原理」を演題として、トレーニングの原則の説明や、ピリオダイゼーションモデルのタイプの解説・比較を、ご自身の研究結果を取り入れながらお話いただきました。筋力増加を促すために、トレーニング強度が主要な刺激となると強調されていました。

この講演については加賀新助手のコメントとともにNSCA公式ブログ（2011年12月26日付）で紹介されていますので、ご覧ください。

<http://nsca-japan.typepad.jp/blog/>

## 学内業界研究セミナーを開催

12月17日（土）仙台大学を会場に3年生対象の学内業界研究セミナーが開催され、約300名の学生が参加しました。今回のセミナーは、21の事業所に参加していただき、各業界の説明・求める人材像を詳しくお話していただきました。学生たちは、お目当ての企業以外にも平均3～4社のブースを訪問し、自分の知らなかった業界などの説明を受け刺激を受けたようです。就職戦線のスタートが例年より2ヶ月遅くなった本年において、この説明会が学生たちの良いきっかけになればと願うばかりです。

< 創職作業チーム >



## 海を越えて輝く学生達 2011(合同報告会実施)

～ 海外研修・短期留学合同報告会～

仙台大学柔道部個別イタリア研修  
 ハワイ州立大学アスレティックトレーニング  
 グ研修アドバンスコース  
 カリフォルニア州立大学ロングビーチ校ス  
 ポーツ栄養&マネジメントセミナー

11月16日(水)17:30～F101教室において、国際交流センター長主催の学生達による海外研修・短期留学合同報告会が開催され、朴澤学長、佐藤滋学長補佐、鎌田国際交流センター長他、総勢46名が参加しました。

はじめに朴澤学長より「国からの補助金を得て海外研修を実施できることは意義深く、世界を知る意味においても参加した学生達は引き続き英語も含め勉学に努めてほしい」とのご挨拶がありました。

最初に発表したのは7月31日～8月20日までイタリアのプレダッピオで柔道の合宿に参加した2名です。(体育3年勅使瓦慧・現代武道1年薬師神桃子)今回の実現に際しては、東日本大震災で甚大な被害にあった日本に心を痛めたイタリアの柔道家チェザーレ・バリオーリ氏が、女子柔道オリンピックチャンピオンの谷本歩実(コマツ)さんを通じ、被災地で柔道をする若者を無償で招きたいとの申し出があり、谷本さんと親交の深い本学の南條和恵柔道部女子監督にお声がかかったことがきっかけでした。

バリオーリ氏は現地でA・I・Z・Eという柔道協会を立ち上げていて、現在4000人以上いる団体の会長です。2人は午前中に古武道やランニング、イタリア語の研修、午後は立ち技などの練習をする生活をしながら、合間をみでは市長を表敬訪問し、その様子が後日地元新聞に掲載されるなど、約20日間の滞在中、積極的に学びました。



最初は通訳が不在だったため、辞書を片手に現地の方々とのコミュニケーションを図ったそうですが、帰国する時には簡単なイタリア語も覚え、言葉の壁を越え理解しあえる醍醐味を経験したそうです。バリオーリ氏は最後にはなむけとして、自身の師である阿部謙四郎氏から教わった「葉月の月100年続く友情が生まれた」という言葉を2人に贈り、別れを

惜しまれたとのことでした。

惜しまれたとのことでした。

参加した勅使瓦君は「これまでは勝つことのみを目標にしてきましたが、バリオーリ氏の教えを伺い、あらためて柔道の本質的なものを見つめる機会を得られ、心より感謝しています」と述べました。

バリオーリ氏は、来年も本学から学生を招いて下さることを検討中だそうで、この経験を是非、他の学生達と共有し継続されるよう望まれます。

2番目に発表したのは、8月15日～22日までカリフォルニア州立大学ロングビーチ校で、スポーツ栄養とマネジメントセミナーに関する短期研修を行った11名です。(スポ情4年大黒ゆきこ・運動栄養3年進藤亮祐・体育3年奥山隆寛・運動栄養2年高木美咲・同 森麻衣子・同 東館良太郎・体育2年鈴木春菜・同 松本雄也・同 櫻井潤平・同 中村麻衣・運動栄養1年松本玲菜)

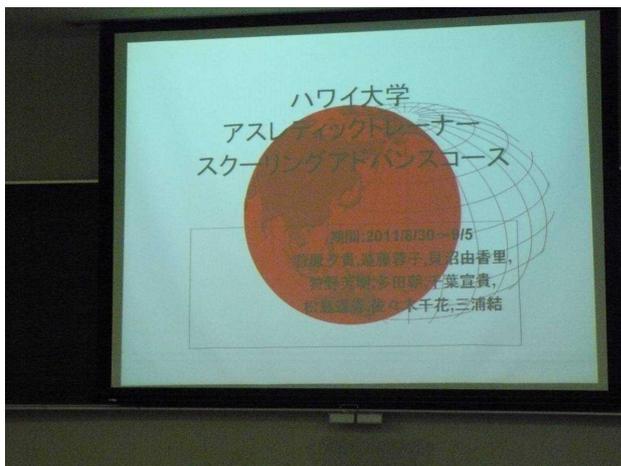
運動栄養とスポーツマネジメントの混合プログラムに取り組んだ学生達は、一般的にアメリカ人は、分野に限らず日本人よりプロフェッショナル意識が高いことや、試合においても競技そのもののみならず、エンターテインメント性を織り込み、いかに観客が楽しめるか、リピーターになって何度も競技場に足を運んでくれるか、も含めて重要な要素であるなど、プロスポーツをビジネスの視点で捉えつつ、成功させるために数多くのことを学んだそうです。

栄養面については、日本で行われている栄養指導と共通する部分が多々あり、自分達が今、勉強していることが世界に通じる手ごたえを得たとのこと。難点は、アメリカも日本と同様、実際にアスリートに指導できる職場が非常に少ないことで、今後、自分達が学んだことが仕事として活かされる場を切望する声が聞かれました。



彼らは、本格的なスポーツ栄養学に触れた経験によりさらに興味・関心が深まり、通訳を介するとどうしても情報が限られてしまうので、もっと英語を学び、次回はできるだけ自分で理解できるようにしたいとの意欲に溢れていました。普段は他の学科のカリキュラムを学ぶことができないため、今回の混合クラスはとても新鮮で自分達の大学の良さを海外で改めて知る機会になったそうです。4年生唯一の参加者である大黒さんは「短期間の研修でとても中味の濃い勉強ができたので、今後は海外の大学への留学を視野に入れた上で進路を検討していきます。」と語っていました。

3番目に発表したのは8月31日～9月6日までハワイ州立大学でアスレティックトレーナーのアドバンスドコースに参加した9名です。(体育3年菅原夕貴・同 遠藤蓉子・同 貝沼由香里・体育4年狩野芳明・同 多田朝・同 千葉宣貴・同 松島遥香・同 佐々木千花・同 三浦結)



初日に今回の目玉の一つである「献体解剖」を見学した学生達は、対応していただいたUH関係者の多大なご尽力により、実際に献体に触る許可も得られ、日本では到底体験できない貴重な学習をしたそうです。アスレティックトレーナー(ATC)は、日本の場合、医師がいないと活動できないのに対し、アメリカでは医療資格として一定の医療行為が認められているなど大きな差があり、選手と監督の間に立ち積極的にコミュニケーション

ンをはかりながら「精神面でのケア」をも担うATCの活躍に、学生達は尊敬のまなざしで真剣に取り組みました。

また、大学院での授業を見学した際、先生がほとんど黒板を使わず学生との会話形式で授業を進めていること、質問があれば学生達は積極的に発言し、その場で疑問点を解決しようとする活気あふれる内容が新鮮だったそうです。

平成22年2月、23年8月に引き続き今回で3回目と、過去最多参加者となる4年生の松島さんは「海外と日本のトレーナーの違いを知りたくて3回研修に参加しました。特に前回「献体解剖」を体験した時は、衝撃があまりに大きくせつかくの機会を十分に活かすことができなかつたため、今回は事前に自分で解剖に関する知識を得た上で臨み、その結果、人体の仕組みや筋肉がどのように作られているかなど、詳しく知ることができとても満足しています。選手と現場で接し、水汲みなど具体的なサポートが可能なこの研修は最大の魅力で、後輩達には是非参加して欲しいです。」と話しています。

佐藤滋学長補佐から「学生達の立派な発表に感銘を受けました。現場で学ぶ大切さに一人でも多くの学生が触れ、視野を広げていって下さい」とのご挨拶があり、2時間にも及ぶ報告会が終了しました。

来年の2月には同大学における英語NICE研修・ATビギナー研修が今回同様、独立行政法人日本学生支援機構からの奨学金を得た形で予定されており、海外での貴重な体験は学生達を一段と成長させる大きな糧となり、今後の勉学への意欲と自信にもつながることでしょう。



## 吉井講師が今年も「エコプロダクツ2011」に出展



写真提供：吉井講師

日本最大級の環境展示会「第13回 エコプロダクツ2011」が15 - 17日に東京ビッグサイトで開催され、吉井講師を中心とする研究グループが昨年に引き続いて振動床を出展しました。この

振動床は、(株)音力発電が開発した「発電床®」の技術をスポーツ分野に応用することを目指しているもので、将来的にはスポーツ施設の電力の一部を利用者自身の自由なスポーツ活動で賄うというビジョンを構想しています。展示会は吉井講師の他、研究チームの阿部篤講師と藤本助教、補助学生がブースに来場した方に対して、説明と体験をしていただきました。本学ブースには3日間で約1000名の来場をいただく大盛況で、12月15日のNHK昼のニュース全国版でも放映されました。



写真提供 / 朴澤学長

## 「第7回スポーツを考える会」開催



2011年12月1日（木）、仙台市青葉区内で「第7回スポーツを考える会」（本学スポーツ情報マスメディア研究所主催）が行われました。考える会は大学と地域を結び、ともにスポーツについて語り合うもので、県内外から業種を越えた40余名が集まりました。

3月11日の東日本大震災後、久々に顔を合わせたメンバーは互いに近況を伝えあい、スポーツを通したふるさと仙台市・宮城県・東北全体の復旧・復興に向け、その絆を確かめ合っている

ようでした（写真右）。

また、日刊スポーツエージェンシーの阿部賢氏（写真左）が座長を務められた「スポーツ報道の過去・現在・未来」では、スポーツ新聞の変遷に加え、将来の豊かなスポーツ文化形成のためには「見る者の品格」を高める必要性がある一と話されていました。

今回は、宮城県のスポーツ振興基本計画策定に向けてただいま奔走中の宮城県スポーツ健康課様に座長をお願いし、皆さんとともに震災後厳しい環境下に置かれたスポーツの「再生」を考えます。興味のある方は、スポーツ情報マスメディア研究所（0224-55-1045）までお気軽にお問い合わせください。

<スポーツ情報マスメディア研究所>

## 北海道道央支部同窓会開催（報告）



12月3日（土）に北海道道央支部同窓会がホテルオークラ札幌で開催されました。57名の同窓生が集結し、本学からも朴澤学長、小池教授、渡辺入試担当課長が出席して情報交換をするなど交流を深めました。また、同支部同窓会の更なる発展を確認しあう大変有意義な時間となりました。

写真提供 / 渡辺入試担当課長

## 細川優樹さんがV・プレミアリーグの大分三好ヴァイセアドラーに入団内定

～ 本学で初のVリーグ選手に～



男子バレーボール部の細川優樹さん（体育学科4年）がバレーボールのV・プレミアリーグに所属する大分三好ヴァイセアドラーへ入団することが内定しました。

本学からバレーボールで社会人に進んだ卒業生は複数名おりますが、石丸出穂監督が就任してからは初めてのVリーグ入団選手となります。

細川さんは秋田県立雄物川高校出身。高校でもインターハイに出場するなど活躍し、本学入学後も1年生から主力として実力を発揮。2年時

には仙台大学を13年ぶりの東北大学リーグ優勝に導き、その後の連覇にも大きく貢献しています。4年からはチームのキャプテンを務め、チームを鼓舞してきました。

男子V・プレミアリーグは今週末12月24日に開幕し、細川さんも大分三好ヴァイセアドラーの一員としてチームに帯同しました。Vリーグでは内定選手の試合出場が許されているため、細川さんは試合にも出場。チームは敗退したもののV/プレミアリーグデビューを飾りました。細川さんの今後の活躍に是非、ご注目下さい。

## 全日本スケルトン選手権

～ ジュニア日本代表の渡辺みずきさんが4位入賞～

12月25日に行われたスケルトン・ボブスレーの全日本選手権大会において、新助手の小室希さんが女子スケルトン3連覇を果たしました。男子スケルトンでは本学OBの高橋弘篤選手（システックス）が2連覇を果たし、渡辺瑞基さん（体育3年）が学生としては前例がない4位入賞という快挙を果たしました。「伊達なSPORT PRO - JECT」の高校生3選手もジュニアオリンピックカップの部で好成績を収めました。

[本学関係]

男子

- 1位 高橋弘篤選手（平成18年度卒）
- 4位 渡辺瑞基さん（体育学科3年）

女子

- 1位 小室希新助手
- 3位 大向貴子選手（平成18年度卒）

[ジュニアオリンピックカップ]

男子

- 1位 佐藤 弾選手（柴田高校2年）
- 2位 野倉大貴選手（柴田高校2年）

女子

- 1位 安藤早紀選手（柴田高校2年）

4位入賞を果たした渡辺瑞基さん（体育3年）



私がスケルトンに興味を持ったのは高校の時に仙台大学OBでソルトレークシティ五輪、トリノ五輪日本代表選手である稲田勝さんとの出会いでした。はじめて会ったオリンピックからスケルトンの魅力を切々と話しされたことで、小学2年から続けてきた野球を捨てて仙台大学でスケルトン競技

に打ち込むことを決意しました。スケルトンの魅力は生身で体験できるスピード感と、自分の成長がタイムに表れる点。今年の好調は、ジュニア日本代表として昨年・今年と参戦しているアメリカズカップでの経験が大きいです。世界のレベルの高さを感じる事ができましたし、競技者としての視野が広がりました。

当面の目標は1月末にオーストリアで開催されるジュニア世界選手権で6位入賞を果たすことですが、最終的な目標はオリンピックでのメダル獲得です。そのためにはプッシュのスピードが課題となります。年々、プッシュのスピードは上がっていますが、まだまだ伸ばせると確信しています。滑走技術には自信を持っているので、プッシュスピードの強化を図っていき、夢を実現させたいです。

## 韓国体育大学の柔道部が本学で強化合宿



12月20 - 27日に韓国体育大学の柔道部員17名と指導者2名が本学で強化合宿を開催しました。これは平成21年より互いの大学を行き来して交流を図っているものです。

韓国体育大学には2月に現代武道学科の学生が訪問する予定になっており、今後更なる交流が図られます。

## 初開催のインカレで女子2位、男子3位 / フロアボール同好会



写真提供:フロアボール同好会

12月24、25日に、フロアボールのインカレ「第1回日本フロアボール学生選手権大会」が初めて開催され、本学フロアボール同好会は女子チームが準優勝、男子チームが3位入賞を果たしました。

フロアボールとは、レクリエーションスポーツであるユニバーサルホッケーと酷似したスポーツで、穴のあいたプラスチック製のボールとスティックを使いゴール数で争う競技です。北欧ではプロリーグが開催されるほど人気の高

いスポーツですが、日本では競技人口が少なく、大学でサークルを持っているのは駿河台大、国土館大、山形大、東北大、仙台大の5校（女子は国土館大を除く4校）のみです。そのため学生だけの大会はこれまで設けられず、社会人の大会だけでした。しかし今年、インカレが初開催されたこともあり、学生への普及も期待がかかります。

フロアボールは世界選手権等も開催されていますが、日本代表キャプテンを務めているのは本学OBの渡部大輔さん（28回生 / 基礎スキー部）です。渡部さんは日本フロアボール協会の普及・広報委員長も務めており、選手としても所属する調布イーグルスを3年連続の日本選手権優勝に導くとともに、2010年の日本フロアボールリーグ最優秀選手に選ばれています。インカレの開催にあたってもご尽力されました。

日本のトップ選手として活躍する先輩を目標に、学生たちの今後の活躍に大きく期待したいものです。

## 宇野澤 衣里さん 東北女子アイスホッケー大会準優勝



優勝だったものの、チームは今年の全国大会でB

リーグを制覇、今年から8チームしか出場できないAリーグで戦うことが決まっております。練習にも熱がこもっているとのこと。練習場所はアイスリンク仙台（仙台市泉区）で週2回。営業時間外の夜9時半から11時まで行い、この他、アイスホッケー人口が増えてほしいとの想いからジュニアチームの指導もしているそうです。自身も父親の影響で3歳からアイスホッケーをはじめた宇野澤さん、「アイスホッケーの魅力はシュートを入れた時の快感と、仲間との信頼関係だと思っているので、それを子供たちに伝えていきたい」と話します。

リーグを制覇、今年から8チームしか出場できないAリーグで戦うことが決まっております。練習にも熱がこもっているとのこと。練習場所はアイスリンク仙台（仙台市泉区）で週2回。営業時間外の夜9時半から11時まで行い、この他、アイスホッケー人口が増えてほしいとの想いからジュニアチームの指導もしているそうです。自身も父親の影響で3歳からアイスホッケーをはじめた宇野澤さん、「アイスホッケーの魅力はシュートを入れた時の快感と、仲間との信頼関係だと思っているので、それを子供たちに伝えていきたい」と話します。

## サッカー部Bチームが全国大会 準

～インディペンデンスリーグ2011 第9回全日本大学サッカーフェスティバル～



学生サッカーのBチームによる全国大会「インディペンデンスリーグ2011 第9回全日本大学サッカーフェスティバル」が12月8 - 10日に愛知県光明寺公園球技場で開催され、本学サッカー部Bチームが東北代表として初出場し、準優勝しました。この大会は、試合への出場機会が少ないBチームの試合機会の提供を目的に開催されているものです。学生サッカー界では総理大臣杯、インカレと並んでインディペンデンスリーグが3大大会と呼ばれていますが、これまで東北大学サッカー連盟はインディペンデンスリーグ

に参加していませんでした。今年初めて東北予選が行われ、本学は東北代表として1回戦の国士舘大学（関東代表）、2回戦の中京大学（東海代表）に1 - 0で勝利し、決勝戦で関西学院大学（関西代表）との対戦に挑みました。試合は五分五分の展開を繰り広げたものの本学のシュートはゴールに結びつかず、0 - 1で惜敗しました。しかし、今大会で得られたものは大きかったようで、Bチームの指揮を執った伊勢コーチ（臨時職員）は「Bチームは7月の東北地区総合体育大会でシーズンが終了してしまっていたが、今年はインディペンデンスリーグを目標にしてモチベーションを高く練習に取り組んでくることができた。全国で通用する部分もあった一方で、選手個人の課題が浮かび上がったので来シーズンまで克服してほしい。」と話し、サッカー部の吉井監督は、「サッカーの強豪校は部員が100名以上所属しているケースも少なくないので、Bチームの選手にチャンスが与えられ大会の意味は大きいと感じている。優勝まで後一步だったため悔しいが、選手たちが得た経験が一番の収穫」と語るなど、選手の成長に満足しているようでした。



## 訃報

平成23年12月25日に前事務局長の佐々木幸夫氏をご逝去されました。佐々木氏は1999年4月から今年9月までの12年半にわたって特に入試部門においてご尽力いただき、2008年4からは事務局長として事務局をまとめられました。心よりご冥福をお祈りいたします。

